



施設名の「こぼほん」は、小林書店が営業しているころ、町内の子どもたちが呼んだ愛称から命名されました。  
「小林本屋」を縮めて「こぼほん」、そのほかにも「小林書店」を縮めた「こぼしょ」やそのままズバリ「こぼやし」などと呼ばれていました。

地道に努力を続け  
空き店舗のシャッターを開け続けていく



(株) まちづくり猪苗代 代表取締役

よし お  
**江花 祥雄** さん

当社は、中心市街地にかつてのにぎわいを取り戻すため、空き店舗となった店のシャッターを、1枚でも多く開けようと事業を進めてきました。開いたシャッターは、18年2月の「ふくすべるぐ」に続いて5枚目です。地道に努力を続け、シャッターを開け続けられるようにしたいと思っています。

年配の人はバス待ち、車待ちや休憩に。児童、生徒の皆さんにはゆとりの広場として。そして、地域の皆さんが気軽に立ち寄れる場所として、すべての町民の皆さんに活用していただければうれしいです。

こぼほんに立ち寄ってくれた

空き店舗利活用事業の一環として、中央商店街の旧小林書店を改装してオープンした「こぼほん」町の歴史、文化や観光などの情報発信基地、町民や観光客が交流する憩いの場として、中心市街地活性化の拠点になることを目指してスタートしました。

まちづくり猪苗代（江花祥雄社長）が開設した「猪苗代まちのえき こぼほん」のオープニングセレモニーは4月28日、同施設で開催されました。

こぼほんは、空き店舗利活用事業の一環として、町内本町の旧小林書店を改装して整備されました。町の歴史・文化や観光などの情報を発信するほか、町民同士の交流や町民と観光客との交流などで、中心市街地の活性化を目指します。

同施設では、観光パンフレットなどの観光関連情報を提供するほか、ノートパソコンを持参すればインターネットへの接続も可能です。また、町内産農産物の加工品や工芸品などの展示販売をしています。そのほか、町のスキーマの歴史など、地域のさまざまな歴史を紹介する展示スペースを設けました。今後は起業したい人を支援するチャレ

ンジショップを開設する予定です。

オープニングセレモニーでは、江花社長が「地域の皆さんが気軽に立ち寄って利用できる場所にしてほしい」とあいさつ。来賓の津金町長らは「中心市街地の再生へ、町民の機運が高まるものと期待している」と祝いの言葉を述べました。

【猪苗代まちのえき こぼほん】

●開館時間

午前9時30分から

午後5時30分まで

●休館日 毎週木曜日

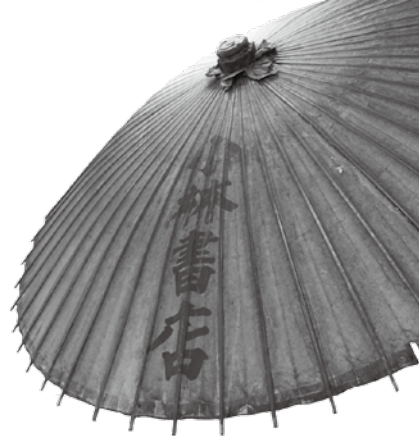
●問い合わせ

☎(85)7412



こぼほん内の展示コーナーでは、町のスキーマについての資料を展示





## 惜しまれながら 閉じたシャッターが 新たな歴史の扉とともに また開き出した

### 商店街の現状

町の中央商店街でもシャッターが閉じたままの店舗が目立つようになってきました。平成2年には100店以上あった商店が、現在6割程度にまで減っています。

1人に1台の車社会の到来、郊外型大型店の進出、コンビニエンスストアやインターネットショッピングの普及など、日本全国の商店街を取り巻く環境は非常に厳しくなっています。大型店の品ぞろえや価格競争力、多様化したニーズや生活形態の変化に応えたコンビニやネット通販は、着実に顧客を増やしました。

一方で、大型店などに顧客を奪われた商店街では、業績不振により閉店する店が増えました。シャッターを閉める店が増えれば、商店街の雰囲気は活気が失われます。店舗

が減れば、そこでは買えない商品も増え、商業集積能力が低下して、商店街自体の魅力や集客力が半減してしまいます。その結果、住民はますます大型店に流れてしまうという、悪循環が起きているのです。

### こぼほんから 活性化を

そのような状況の中で、閉じたシャッターを再び開けたこぼほんには、大きな意義があります。1枚でも多くのシャッターを開けることは、商店街の活気を取り戻す第一歩につながります。

こぼほんで猪苗代の魅力が詰まった商品や旬の情報を紹介することで、中央商店街そのものの魅力が増し、オリジナリティにあふれる猪苗代ら

しい商店街を作り上げることにもつながります。中央商店街の魅力が増せば、さらにお客さんが増えるという良い循環が生まれ上がります。

生産者やお店の人の顔を見ながら、安心して買いたい物ができること。さらに、その商品が猪苗代でしか買えない魅力にあふれていることは、大型店にはないメリットです。また、商店街に人が集まることによつてできる「人と人とのつながり」は、防犯や子育てなどいろいろな役割を担っていた、古き良き時代の地域コミュニティを再生させることでもあります。

中央商店街の活性化は、商店と住民が一体となつて取り組まなければならない課題なのです。

## 生まれ変わった 小林書店

小林書店の前身である小林商店は1873(明治6)年、米屋として創業。明治の終わりごろになると、当時の百貨店にあたる生活雑貨の店となり、町民の生活を支えました。そして終戦後の昭和20年代、書籍、文具を取り扱う小林書店として変貌を遂げ、営業を続けましたが、2006(平成18)年、惜しまれながら閉店しました。

閉店まで社長として店を切り盛りしてきた小林光子さんは、この事業の申し出を受け、「町のために協力する」と1階の店舗部分を提供しました。セレモニー当日、改装された店舗を見た小林さんは「再びシャッターが上がってうれしい。これからも、もっと人が集まる施設になるように提案、協力をしていきたい」と話しました。

100年以上の永きに渡り、中央商店街を見守り続け、一度はその幕を下ろした小林書店。「こぼほん」として生まれ変わり、これからもこの町を見守り続けます。



これからも提案や協力をしていくと話す

小林 光子さん

## メイド・イン・ 猪苗代 というブランド

「こぼほん」に展示、販売されているものは、すべてがメイド・イン・猪苗代。こぼほんに並べられた農産物加工品、工芸品やパンフレットには猪苗代の魅力が詰まっています。

この町に住むわたしたちでさえ、知らないもの、知らないことがたくさんあります。まずはわたしたち住民が「こぼほん」に立ち寄って、猪苗代の魅力を、猪苗代の今を知ってみましょう。きっと新しい発見があるはずです。

この町から発信する  
この町にしかないもの  
今、こぼほんで  
オンリーワンの花が開く

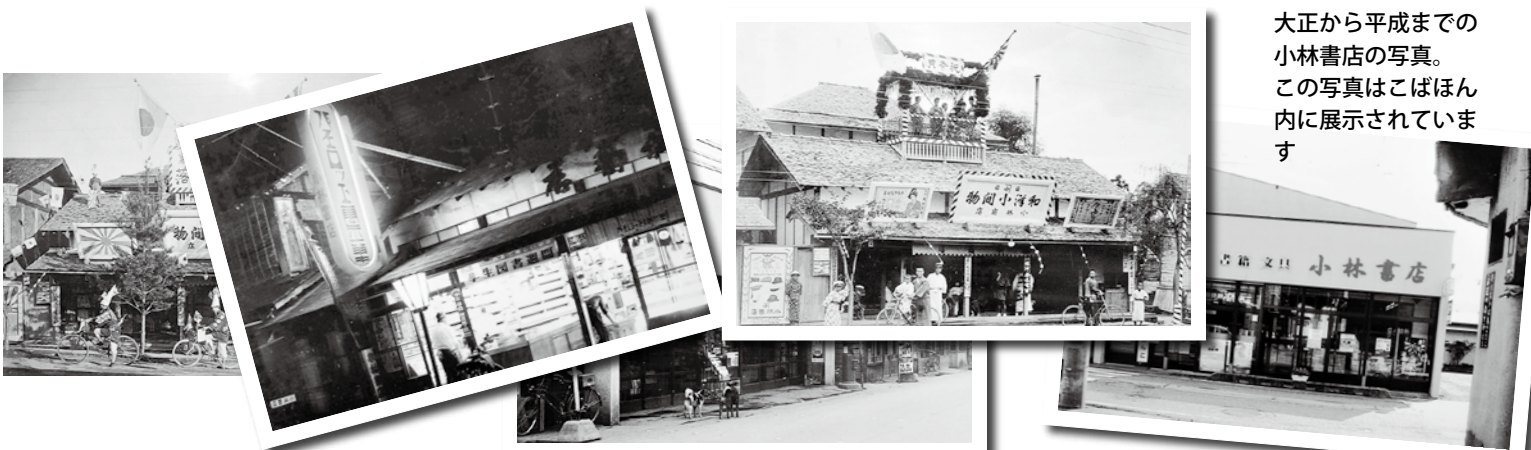


【写真上】スタンドガラスランプ(スタンドガラスギャラリーらんぷの里) 日本のみならず海外でも高い評価を受ける松崎徹氏の作品を展示

【写真右下】ブルーベリー飴(きずなファーム) 目にやさしい、こぼほんの人気ナンバーワン商品

【写真中下】みちのく一番味噌(麴屋商店) 創業100年を超える猪苗代の老舗の味

【写真左下】中ノ沢伝統こけし「たこ坊主」(会津磯川工房) 愛嬌がある独特の風貌をしています



大正から平成までの小林書店の写真。この写真はこぼほん内に展示されています





# 開け、未来

この中心市街地に、かつての活気を取り戻す。その第一歩が「こぼほん」です

町民の皆さんの声が次のシャッターを開ける。「まちづくり」から「まち育て」へ皆さんの「まち育て」を聞かせてください



町企画財務課 企画調整業務  
まちづくり担当

としかず  
**柴田 敏和** 主査

近所にある病院や銀行などの用足し帰り、買い物ついでにちよつと立ち寄れば誰かがいてお茶飲み話ができる場所。各地域にはこんなものもあつたのかと、新しい発見ができる場所。こぼほんは、そんな場所であればいいと思います。

お年寄り夫婦、一人暮らしや家族連れなど、いろいろな人が集って、まちなかの思い出話や積極的な地域づくりなどで話が盛り上がる。そんな「人と人とのつながり」の空間づくりが社会全体に求められています。

「まち育て」に実際にかかわった人が味わえるのは達成したときの「感動」の

二文字です。「こんなことをやってみよう」「あれは残して活用すべき」「こぼほんにも、これがあつたらしいのに」など、普段皆さんが思っていることも聞かせてください。

皆さんの結束力と「やってみよう」がさらに人々を巻き込んで、次のシャッターが開かれます。

役場主導で実施するのはなく、皆さんの声で楽しい中央商店街を育んでいく本当のまち育てへ。こぼほんが、その足掛かりになればいいと思います。

## 取材を終えて

こぼほんが、すべての利用者に親しまれ、愛される施設になるためには、町民の皆さんの力が必要です。町民の皆さんや観光客が、毎日情報交換をすることで、そこにある情報は日々変化していきます。

この町に住んでいるわたしたちでさえ、足を運ぶたびに新しい発見がある。また来たい」と思う何かがある。こぼほんがそんな場所になればいいと思います。わたしたちが楽しい場所ならば、観光客も寄りたいはず。心を開いていろいろな人と交流を深めれば、猪苗代発の情報は、どんどん広がっていきます。

## 開け、未来

中心市街地だけでなく、町全体が活性化する未来が開けた気がしませんか。わたしたちの願いをかなえるのは、ほかでもない、わたしたちの行動です。まずは、わたしたちがこぼほんに足を運んで、お茶でも飲んでみましょう。

特集 開け〇〇 終わり

インターネットを利用して、世界中の情報が瞬時に得られる時代になったとはいえ、それも万能ではありません。入手できる情報には、限りがあるからです。

ネットには載らない小さな情報、町の旬な情報や限定の情報。町を訪れる観光客は、そういう情報を求めています。それを提供できるのは、こぼほんに集まった町民の皆さんです。

こぼほんが町の情報発信基地であるためには、パンフレットやスタッフが持っている情報だけでは足りません。皆さん一人一人が持っている情報を、笑顔とともに口コミで伝える。そ

れが何にも勝る信頼できる情報なのです。

「こぼほんに行けば、近所同士、町民同士だけではなく、観光客の皆さんとも心を開いて交流ができる」そんなふうになっていければと思います。

最後に、町民の皆さんにお願いがあります。

皆さんの家に眠っている骨董品や古い資料など、町民の皆さんに知ってもらい、後世に残していきたいものがあります。ぜひ連絡してください。貴重な資料として展示していきたいと考えています。皆さんのご協力をお願いします。



(株) まちづくり猪苗代  
まちづくり推進事業課

けんじ  
**渡部 研二** 課長

町民の皆さんが観光客に口コミ情報を伝える。そんな交流ができる場所にしたい



「こぼほんには、お茶を飲んで一休みできるスペースがあります。地元の人、観光に来た人も、気軽にお茶を飲みに来て、お話を聞かせてください」「この町には、皆さんがまだ知らない商品がたくさんあります。何度でも足を運んでください。お待ちしております」とスタッフの2人。